

あるとき

長谷川時雨

青空文庫

むさしのの草に生れし身なればや

くさの花にぞこころひかるる

と口ずさんだりしたが、

「わたしの前生はルンペンだつたのかしらん。遠い昔、野の草を宿としてゐて、冷こ
んで死んだのかもしれない。それでこんなに家のなかにばかりゐるのかしら？」

門を一足出て、外の風にあたると、一町も千里もおんなじだと氣が輕くなつてしまふ
のにと、いふと、出おつくうがる性なのを知つてゐるものは手を叩いて笑つた。

今朝ふと、雨上りの草の庭を眺めてゐて、海をおもつた。それも涯しないひろい大洋が
戀しくなつたのだ。

昨日のはなしの折にも、私は毎年繰返していつてゐる、秋には山へいつて、山の風に
吹かれてくるのだと、今年も出来ない相談であらうことを楽しく語りながら、高原に立つ
て秋草を吹き靡かす初秋の風に身をまかせて、佇んでゐる自分を描き、風の香をなつかし
んでゐたのだ。足を勞さないで、居ながらに風景を貪る癖からなのか、それとも、空ばか
り眺めくらしてゐた太古の、前生人からの遺傳か、それこそ一足から千里も飛ぶや

うな空想が、私にはなかなか役にたつ遺産で、私の心を、役^{えん}の行^{ぎやう}者のやうに、雲に
て飛ばしてくれる。

しかし洋^{わだ}の原^{はら}が戀しくなつたのは、高^{やま}原^{はら}の風が迂^うりこむやうに、空想が海を走つたばかりではなかつた。私の二人の古い友達が、海^{うみ}のあなたに渡^{わた}つて、長く歸らないことが、堪
らなくさびしくなつたのだつた。

「此^こ間^{ひだ}あなたに小^こつぴどく怒^{ゆめ}られた夢を見た。いつか長い手紙を頂いて、毎日毎日友
達は嬉しいなと思ひながら、手紙を書かう〜と思ひつつ段々のびたのと、あれから久
しくたつて、やうかんがついたといふので、遠いとこまで足を運んだのですが、一度
は代人でパスポートがなくてダメ、二度目は休み時間、三度目はとう〜間に合はず羊
羹は洋行して歸つてしまつたので、追かけもならず、御心入れをとう〜ムダにしてし
まひ、何とも申譯もないと思つてた時の夢だつたのです。元氣であて下さい。パリにな
んかベンベンとしてゐると、だんだん馬鹿になることがわかつてゐるけれど、おいそれ
とは歸られずに居ます。どうぞ病氣はしないで下さい。やせて返事が消えては大變だか
ら待つて下さい。

正宗さんの何か集があつたら送つて下さい。たのみます、なるべく早く。

これはパリ・オペラ夜景。どつしりしてますが、もう汚れて鼠色です。岡田八千代」

とした七月二日出の繪はがきは、シベリア經由なのになる一ヶ月もたつて、二月十日に出して七月末の日に返送された「虎や」の羊羹やうかんの小包と前後して私の手に渡つた。

なんで、私が怒つた夢なんぞ見たのだ。悲しがつてゐる夢を見て、早く歸りたい氣持になつてくれればよいにと、さびしかつた心が、海を行く空想を逞しくさせたのだつた。

——かう降りつづいては、汽船ななかの室でも垂れこめて——

土用どようのうちの霖つゆのあめ雨びようを、微恙びようの蚊帳びようのなかから眺め、泥濁どろにごつた渤海あたりを、帆ジャン船クすなどが漁つてゐる、曾て見た支那海しなのうみあたりの雨の洋中わたなかをおもひうかべる。そのかたは

ら、この冷氣はオホツク海から寒流がくる潮しほの加減だと書いてあつたがと、ウロ覚えの新聞知識で天文學者の卵でもあるかのごとく案じ、さういへば、ロシアでは氷に閉された北洋の潮流變更に苦心してゐるといふが、學術的にそれが成功すると、我國の被害は甚大で、氣候の變化があらうと、嘘か誠か、何かのはしで讀んだ事が妙に氣がかりにもなるが、無論それはとりとめもない考への主流でなく、眼は洋中わたなかのごとき庭の青さと、銹銀色さびぎんいろの重い空の、霧つぽい濕つた外おもてを見てゐたが、空想旅行の方はとつくに船ふねはてて上陸し、パリの友達の寓居をノックしてゐた。

いつぞや林芙美子さんが、パリの食品市場で、八千代さんらしい後姿を見たことを話してくださったのには、黒い洋服で、長い羽根^{なが}のついた帽子、袋とか籠とかを腕にして、年齢^{とし}をとつてゐたさうだが、それは、およそ私の友達が死ぬまでもしさうにもなく、想像にもさうは思はれない姿だった。私は鼠色の彼女が繪ハガキへ書いてよこしたパリ・オペラ座^ざのやうに、どつしりしてゐるが、古びた鼠色で彼女があつてくれないことを、友達の名譽恢復のために祈つて、扉の外で待った。

私の友達は、すこし意固地なくらゐる我儘なところがあつて、身にそぐはない洋服や帽子の飾りをつけて歩くことの出来る氣質^{たち}ではなかった。三年や五年着るものに不自由するとは思へない。彼女は白い足袋がなくなれば、足袋もつくれるし、草履も工夫して造れる人だ。まして着物でも帶でも、きちんとした裁縫が出来る。身のりのもの一切自身でとのへられないものはないのだ。若い時から日本髪さへひとりで結^ゆへたのだった。私たち明治時代に生れたものは、心は新らしいものを貪りながら、躰^{しつけ}られたことは昔の女とおんなじだったのだ、身^み嗜^{みだしなみ}には頑固^{かたくな}なほどだった。ことに友達は目立たない澁いつくりを好んだ。流行や周圍に負ける人ではなかった。吟味のゆき届くたちだった。西洋のお婆さんになつたとしても、好み^{この}のよいことに異^{ちが}ひはない筈だ――

と思つてゐると、すこし痩せたかと思ふが、あの、ありあまる髪をキュツとゞ《しめ》て、無造作に巻いた、色の白い顔が笑つた。胸もともキッチンとした縞の着附けで、例によつて灰拔けあくぬのした瀟洒な彼女だ。この間、讀賣新聞の文藝欄が傳へた、日本劇の衣裳や監督をしたといふ時の、他の人と竝んで寫つてゐた、寫眞とちつとも違はなかつた。

私はパリで逢つてゐるといふ事なんぞは素つとぼしてしまつて、勝手にいつたものだ。

「甘いものそんなに好きぢやないの知つてゐるんだけど、果實くだものは送らなくつたつてあるだらうし——」

私はくすくすと笑ひだしてしまつた。友達は蜜柑があんまり好きで膽石わづを患わづつたことがあつたのだ。ずつと前にも急病だといふので澁谷の家へ急いでいつたら、矢つ張り蜜柑の食はずぎだつた。私が行くと、寢臺したの下へ、あわてて蜜柑の皮が山のやうになつてゐるお盆を押しかくしたが、苦しがつて吐いた蜜柑の汁が、實みが、顔にくつついてゐて、すぐさま露見したことがあるのだ。

「歸つてきて、燦々さんく會で、澤山ためこんでおいた、そつちの演劇しばあの講義を受けもつてくれない？ それに——」

私はそこで急に思ひついたのだ。それは昨夜ゆうべ讀んだ、ロシアで九月一日から十日まで大

演劇祭のあることだつた。

「モスクワへ寄つて、大演劇祭に上演されるものをみんな見て来てしまはない？　ね、實に好い機會だから。出来るだけ、新しい演劇をためこんできて、今までパリで見たものと對照して話してきかせてくださいね。屹度みんなも期待してくれる。そしてね、ゆつくりと、長く長く實によく貴女^{あなた}は見ておいたのだから、日本の芝居と考へあはせて見てね。」

そんなことを言つてゐるうちに二人^{ふたり}は泣いたやうだつた。現實の空想家の眼はぬれた。

私は勝手にしやべりつづける。

「わたしは、も一度海^{いちど}を越して、ロスアンゼルスへ行くの。」

其處^{そこ}には、この友達が一時非常に仲をよくした田村俊子さんが居るのだ。

「俊子さんは、鈴木さんが（夫君）日本へ來てゐて、突然なくなつたので、大變嘆いて、ひとりでバンクーバに居られないから、ロスアンゼルスは氣候もいいし、上山浦路さんも獨りで残つてゐるから、そこへ行くといつてよこしたきりなの。」

一本の齒が抜けるとほかの齒が寒い。女でおなじやうな仕事をしてきた人たちが、みなからいたはられるところに、異境で涙にひたつてゐるのを思ふと苦しい。私は、私なんぞでも、日本に残つてゐるものは、身をいたはらなければいけないと思つた。私一人の死でも

外國に居るさびしい人たちには、一本の齒がぬけたやうに寒く感じられるだらう。で、私は友達にむかつて元氣に言つた。

「俊子さんは、ハリウッドかなんかで、素張らしい映畫脚本でも發表するかもしれない。あの位な腕前は、さうザラにあるもんぢやないから、屹度立直る。」

田村俊子作とか監督とかいふ映畫が輸入されてくれば嬉しい。私がよろこべば、私を愛してくれる若い女たち^{ひと}がヂャンヂャン宣傳してくれるにきまつてゐる。さうなると若い男衆たちも追従する。盛んなるかな！

私は嬉しくなつて笑つた。友達の手を握つて振る恰好をして、自分^{じぶん}だけの手を振つた。「八千公^{やちこう}しつかりね、モスクワでは、十日間に廿二回の觀劇よ、好い機會だから是非見ておいてください。あたしたち隨分ぼんやりして生^{いき}てしまつたんだから。アメリカへも一緒に行けると好いんだけれど——」

若いとき、曾我の家五郎十郎劇を見てきて、二人で眞似て興じたときの、五郎の役に、及五郎に扮した友達が、自分でもをかしくつて、キウキウ笑ひ泣きしながら演じた無邪氣さが眼に來た。みんなで寄^よつて、あんな笑ひを寫したらいいな——
再び、わたしは笑つてゐるやうな聲を出した。

（「早稻田文學」昭和九年九月號）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「早稲田文學 昭和九年九月號」

1934（昭和9）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あるとき

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>